

萩

久保田万太郎

青空文庫

おやくそくの萩の根、いつでも分けてさし上げます。おついで
のせつ御来園まち上げます、と百花園の佐原平兵衛君からはがき
が来た。四月のはじめのことである。……さういはれたからとて、
右からひだり、おいそれとすぐ出かけて行けるいまの身の上では
ない。……そのまゝ、返事も出さず打捨りッぱなしにしておいた。
と、その月のなかばすぎ、田圃さんこと沢村源之助さんが死ん
だ。たまにしか逢ふ機会をりはなかつたものゝ、わたくしにすれば、
十四五年にわたる古い附合である。そして、逢へばいろ／＼と、
いつもいゝ話を聞かせてくれた人である。勿論、わたくしはくや
みにも行けば告別式にも行つた。……しづかな、しみりした、

けばくしいところのちツともない告別式だつた、……わたくしの記憶にもしあやまりがなければ、その日、曇つて糠雨がふつてゐた。……それで、一層、わたくしにさう感じられたのかも知れないが、とにかく、ほとけのその晩年にいかにもそぐつた、……しんみりした……といふことはまた、たま／＼ときは春の末の、花の散つたあとの、やさしい、可^{なつか}しい感じのする告別式だつた。初七日の来たとき、わたくしも、東京会館の法事の席にまねかれた。その席で、同時に、亡き人の目のなかに入れても足りないほど可愛がつてゐたむすめさんと、木村錦花君のむすこさんとの結婚が松竹の大谷さんによつて披露された。これで田圃さんも安心して行くところへ行けるだらう。わたくしは胸のひきしまるの

を感じた。……主卓の花の白いあやめが、そのかなしみと喜びに
むかつて、しづかに、つゝましく、その花びらを垂れてゐた。

だれも無言で珈琲を啜つた。そして、やがて、無言のまゝそれ
／＼の席を立つた。

わたくしは小村雪岱さんと一しよに東京会館の階段を下りた。

「どうなさいます？」

小村さんはいった。

「とにかく銀座まで出ませう。」

わたくしはこたへた。で、そのまゝ、ぶら／＼、銀座のはうへ
向いてあるいた。しら／＼とした感じに曇つた午後だつた。時
計をみるとまだ二時すこしすぎたばかりだつた。

「こんな時間に、こんなところを、こんな暢気にあるくなんてことはとても考へられないことです。」

と、ほとく述懐するやうに小村さんはいつた。……新聞の続きものゝ挿絵を二つも三つも描かなければならない小村さんにとると、夜の、それこそ、九時、十時にならなければ、自分の好き自由につかへる時間といつてはもてないのだつた。

「それアさうですよ。……こんなときでゝもなければ……」

それにこたへてわたくしもいつた。「こんな時間に、こんなところを、わたしだつてうそくあるいちやゐられません。」

「そんなに、いつも、おいそがしいんですか？」

小村さんは、信じられないやうに、わたくしの顔をのぞいた。

「いゝえ、いそがしいといふよりも。……矢つ張しばられてゐるんです。……つまりさうなんです。……あなたがお仕事にしばらくゐるやうに、こツちは、その日〳〵の義務にしばらくゐます。……ある時間から時間までのあひだ、いやでも、身についたわがまゝを封じこめなくちやアなりません。」

「樂ぢやありませんね、おつとめも……」

「もと〳〵野育ちに育つた人間です。……さういふ風に出来上つてゐる人間です。……いゝんだらうか、こんなことをしてゐて。」

……とき〳〵〳〵さう思ふことがあります。」

……四五年まへ……だつたと思ふが、もツとになるかも知れない。新派の伊志井寛が、大阪のあるあちやば芝居へ上置になつて

行つてゐたことがある。そのとき三宅周太郎君が、かれのために
 ふかくそれを惜しみ、ある雑誌に一文を草し、オンミキトクスグ
 カヘレ、さうした電報の文句でそれを結んだことのあつたのをわ
 たくしは覚えてゐる。……オンミキトクスグカヘレ。……それと
 これとは違つても、わたくしにも、さういふ警報がもう発せられ
 ていゝのである。

銀座へ出て、小村さんの知つてゐる店で一休みしたあと、……
 小村さんはいろんな店をよく知つてゐる。……仕事のなかへ歸つ
 て行く小村さんと別れたわたくしは円タクを拾つた。

「向島。」

小村君と話してゐる間、今日のやうなとき行かなかつたらいつ

また行けるか分らない、とわたくしはさう思つたのである。すなはち、そのまゝ、モーニング形なりでわたくしは百花園へ乗込んだのである。

いゝ塩梅に佐原平兵衛君はゐてくれた。「お待ち申してをりました。」とわたくしの顔をみるなり、すぐ園丁にいひつけて、大きな萩の根かぶを三つほど掘つて来させた。そして、自分は、どこからかみかん箱をもつて来て、園丁とふたりでそのなかにそれを入れ、さげることが出来るやうに荒縄までちやんとかけてくれた。

が、いくら下げることの出来るやうにしてもらつても、とても下げてあるけるものではなかつた。重いことも重ければ、嵩も大

きかつた。……わたくしは、自動車をよんでもらひ、事務のやうにそれを積みこみ、そのまゝ事務のやうに家に歸つた。……さうした行動のまへにどんなにモーニングの役に立つたことだらう。家へ着くともうあかりがついてゐた。夕闇の中、わたくしは女中に手伝はせて、その根かぶをそれ／＼庭の土のなかにうつした。源之助わすれじの萩植ゑにけり、さうした句がその時わたくしの口に上つた。

半月ほどすると、ちら／＼とそのかぐろい根かぶのあひだに、青い、あかるい芽のひかりがさして来た。

「しめた、ついたぞ。」

それをみつけたとき、ある朝、わたくしはおもはず高い声をあ

げた。

「大丈夫さうですね。」

縁側に出て来て妹もいった。

「大丈夫だ。」

それにこたへると一しよに、たま／＼箒をもつて庭に下りてゐた女中にわたくしはいつた。

「わすれないで水を遣つてくれよ……それから油ツ粕……」

「油ツ粕はあんまりやらないほうがいゝんださうで御座います。」

「どうして？」

「この間、植木屋さんがさういつてをりました。」

「ぢやあ、まア、まかせる。……いゝやうにやつてくれ。」

それ以来、わたくしは、朝、起きるとすぐ庭に出た。そして、
 夕方、勤めから帰るとすぐ、洋服を脱がない前、まづ縁側に立つ
 た。それにこたへて萩のはうも日毎に成長した。そして、そのあ
 とまた半月ほど経つたとき、一株の如きは、伸びて、水を遣る女
 中の肩さきをさへ越すまでになつた……しかもその伸びざまの水
 々しさ。……風にからまるその青白い影の、すでに、早くもそこ
 に「夏」のそよぎをみせてゐるのがはつきりわたくしに感じられ
 た。

「もつたいないなア、むぎ／＼これを切つてしまふのは……」
 「切つてしまふんで御座いますか？」

女中は目をまるくした。

「梅雨に入るまへに、一度、伸び切ったところをかまはず、一尺ぐらゐに切つてしまはなくツちやアいけないんださうだ。……さうしなければ、秋になつて、花がよくつかないんださうだ。」

「さうなんで御座いますか。」

信じられないやうに女中はいつた。

五月の末から六月にかけて急にわたくしはいそがしくなつた。うそのやうに、つゞいて、いろんな人がわたくしのそばから死んで行つたのである。今日も告別式、明日も告別式、わたくしはモーニングでばかり毎日の事務を執つた。なかには勿論、通り一ぺんの顔出しだけではすまないもツと身近な人たちもゐた。……南部修太郎君のやうな、鈴木三重吉さんのやうな、内山理三君のや

うな、……が、こんなになの死にあふといふのもつまりはそれだ
け、こツちが年をとつたんだ。ぐづくしちやアゐられないんだ。
……わたくしはわたくしにいつた。

その間に、萩は、一尺ほどの高さの丸坊主にされた。そしてち
きに梅雨が来た。陰気な雨が倦きずによくふつた。

「大丈夫でせうか？……のびるでせうか、また？」

心配して妹はいつた。

「大丈夫だよ、伸びるよ。」

さうはいつたものゝ、その雨に濡れそぼちたみじめな丸坊主の
けしきを見ると、失敗しくじつたんぢやアないだらうか、このまんま枯
れてしまふんぢやアあるまいか、わたくしにもありやうは心細く

さう思はれたのである。

が、そんな心配するがものはなく、間もなく萩は伸びはじめた。しかも今度出て来た葉は、莖は、まへよりも、もツとしなやかに、もツと柔かに、しツとりとした手触りをさへもつてゐた。……やがて梅雨があがり、日ざしの溢れの濃くあかるい七月の来たとき、縁さきにかけた葭すだれの裾に、くツきりと、その葉の、その莖の、こま／＼とした影のむらがりが染めだされた。……その前後、神明さまの森に、遠く、しづかに、蟬の声が聞えはじめた。

その蟬の声のなかに盆は来た。ことしはわたくしのところは新盆である。いまゝで、わたくしのところ、仏壇といふものをもたなかつたが……先祖代々の位牌の入つてゐるそれは両親のうちの

方で保管してゐる……新盆をむかへるのを機会にこんど新調した。そしてわたくしの部屋の一部に手を入れて、それをそこに置けるやうにした。……それと、白地に胡粉ですゝきを描いた盆提灯を百貨店の家具部でさがして来て、わたくしの部屋のまへの軒さきに下げ、毎晩それに火を入れた。……ほんたうにすると、全くの無地でなければいけないのださうだが、それではすこし淋しすぎる、さう思つて、わざと、さうした絵のあるのをわたくしはえらんだのである。

しかし、そのあと、それよりも、もつと立派な提灯をはう／＼からもらつた。新盆にかぎつてのさうした仕来りのあることを知らなかつたわたくしはめん喰つた。いそいで、一つづつ、はう

／＼の座敷にわけて下げた。どれにも、すゝきが、桔梗が、女郎花が……秋くさが美しく描いてあつた。なかに一つ、死んだ女房に一ばん因縁の深かつた親類から来たものに小さな切子灯籠があつた。世にも真つ白な房をたれた、清浄そのものゝやうなすがたをそれはもつてゐた。……わたくしは、真菰を敷き、蓮の荅をそなへた仏壇のまへにそれを下げた。

十三日が来た。お精霊さまの来る日である。わたくしはふだんよりやゝ早めに勤めから帰り、迎火を焚いた。……妹がはうろくと芋殻とを格子さきにもちだすと、こゝろえて女中が大きな門をあけた。……急にその門のそとの夕あかりがながれこんだ。……朝からふつてゐた雨の止みかけた、折からのそのあかるい夕あか

り。……そこに、たま／＼うそのやうに人通りがたえてゐたのである。

迎火は燃えた。

「さア来るぞ、ママが……」

わたくしは子供にいつた。「ちらかツてゐると機嫌がわるいぞ。」

「ふん。」

子供はさびしく目でわらつた。

迎火は消えた。

わたくしは家のなかへ入つた、……家のなかにあかりがあかるくついてゐた。……なぜかわたくしに安心に似た気もちが感じら

れた。

子供と、妹と、大きい女中と小さい女中、楽屋惣出でもそれだけの、迎火を焚いたときはさびしかつたが、十五日の晩、送り火を焚くときには、突然のお客さまがあつたりしてにぎやかだつた。すなはち前々からの約束で、夕方早くから、真船豊、大江良太郎の両君がみえ、枝豆だの、トマトだの、けんちん巻だの、芋莖和だの、茄子の揚出しだの、さうした盆らしい、簡素な感じのものばかり載つた食卓のまへに、わたくしと三人、ビールをぬいてすわつたとき、おもひもよらない永井龍男君が、新盆だからと、わざわざ社の帰りによつてくれたものである。……わたくしたち夫婦は永井君の結婚のときなかうどとして立合つた。……といふだ

けで、その後、なかうどらしいことを何一つこツちではしてゐないのである。……にもかゝはらず、永井君は、あくまで義理堅かつた。……さうした折りめ切れ目をはツきりさせなければ気がすまないらしかつた。……

勿論、永井君にも、ビールをのむ仲間に入つてもらつた。話は弾んだ。前記、分けて下げた盆提灯の、そのどれにも入れた火のひかりが、暑いのですだれは巻いてあり、夕方まだあかるいうちに打つた水のなほ乾き切らない庭の上に、さうした場合の風情をみせてほのめいた。

と、やがてまた、玄関のベルが鳴つた。

「伊志井さんがおみえになりました。」と女中がつたへた。……

役をすました伊志井寛が芝居から駆けつけて来たのである。

かれのわらひ声をえて食卓のまはりの人かずは倍加した。……かれはさういふ陽気な存在なのである。……が、同時に、葛の葉のうらを返せば、かれにとつてもことは「さる人」の新盆なのである。……その「さる人」のために、どんなにかれは、しなくつてもいゝ苦勞をしつゝけたことだらう。……だから、かれの、さうやつて陽気にわらへるのは、いまなほ、人のまへでだけかも知れないのである。……

送火を焚く用意が出来た。わたくしたちは立つて玄関に出た……土間に下り、格子のそとに出て、はうろくのまはりをおもひ／＼に取巻いた。……送火はあか／＼と燃えた。

盆をすぎると、もに日にまし暑さはつのつた。……その暑さに怯げたかたちに、日にまし、萩の勢ひはおとろへて来た。

「どうしたんだらう？……矢つ張、駄目なんぢやアないかしら？」
と、子供はいつた。

「まだ分らない。……百花園のだつてまだこんなものに違ひない。
……ほんとに伸びるのは九月だ。」

わたくしは強情を張つた。……が、それから十日ほどして、浅草まで行つたついでに、百花園へまはつてみたとき、そののうわたくしのうちの萩の五倍も六倍もの高さに伸びてゐた。そして、その間に、紅蜀葵だの、女郎花だの、男郎花だのがすでに秋のあはれを咲きいでゝゐた。

佐原平兵衛君は留守だつた。

結局、わたくしのうちの萩はわたくしのうちの庭の土になじまなかつたのである。……わたくしの毎日の、いまのわたくしの生活に、哀しく何んとしてもなじまないやうにである……

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆 別巻14 園芸」作品社

1992（平成4）年4月25日第1刷発行

1996（平成8）年10月30日第4刷発行

底本の親本：「久保田万太郎全集 第一一卷」中央公論社

1968（昭和43）年3月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2015年3月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

萩

久保田万太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>